

氏名	風間 みどり
学位の種類	博士（生涯人間科学）
学位記番号	甲第生5号
学位授与年月日	2015（平成27）年9月24日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第3条第3項第1号
学位論文題目	「見守る」しつけ方略と子どもの他者理解 （“Mimamoru” Parenting Style and Children’s Understanding of Others）
論文審査委員	主査 教授 唐澤 真弓 副査 教授 小田 浩一 副査 教授 工藤 恵理子 副査 鎌倉女子大学児童学部児童学科教授 佐藤 淑子

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

### ．論文内容の要旨

「見守る」しつけ方略とは、親が子どもの自主的問題解決力を鑑みて、敢えて言語的な指示や教えをせずに、子どもに時間的猶予を与えて待つという方略である。日本の子育てや教育の中でよく使われている方略であるが、それが子どもにとってどのような意味をもつのか、実証的な検討をしたものは少ない。本論文は、日本の親の「見守る」しつけが、子どもにとってどのような影響を与えているのかを、行動指標と生理指標を用いて検討したものである。

第1章では、これまでの日本の子育ての比較文化研究を概観し、日本の養育態度にみる関係志向性として、「気持ち主義」のしつけが行われてきたこと、日本における関係志向的自己の確立のために「いわれないでもわかる子ども」が発達目標とされてきたこと、さらにそれを実現するための「見守る」養育態度が保育場面でみられてきたことを指摘した。その上で、明確な言語化がなされない「見守る」しつけ方略は、学習目標や

内容が明らかに提示されず、子どもにとって学習することが困難な方略である可能性を示し、「見守る」しつけ方略の子どもにとっての意味を検討する必要性を示した。

第2章では、日本では「見守る」しつけ方略が他の文化と比べて頻繁にみられるものかどうか検討するために、養育態度の日米比較を行った。日米の母親に具体的な状況での子どもへの対応をたずねる質問紙 (SOMA: Socialization of Moral Affect-Parent of Preschoolers :道徳的感情の社会化 - 幼児をもつ親の養育態度;Rosenberg, Tangney, Denham, Leonard, & Widmaier, 1997) を実施したところ、日本の母親は、アメリカの母親に比べて、子どもの行動に介入しない態度をとること、つまり「見守る」しつけ方略を多く用いていることが明らかになった。さらに、「見守る」しつけ方略を親がどのように用いているかを検討するために、日本の母親を対象にインタビューを実施した。アメリカでは、Neglect または Ignore と分類される「敢えて何も言わず、待って、見守る」しつけ方略を、「言わないでもわかる」子どもに育てて欲しいと考え、日本の母親が用いていることが明らかにされた。

第3章では、親の見守るしつけ方略を、あいまいな養育態度と再定義し、子どもの他者理解能力と実行機能との関連を検証した。SOMA の下位尺度、言語的なはたらきかけを一時的に控える「言わないで見守るしつけ方略」(Neglect, Ignore)と、子どもの行動に対して子どもが予期していない他の視点から言う「アンビバレットなしつけ方略」(Ambivalence) の2つを「あいまいな養育態度」とした。その上で、子どもの心の理論、他者感情理解、実行機能抑制制御とあいまいな養育態度との関連を検討した。その結果、あいまいな養育態度は、4歳児の心の理論、他者感情理解との間に負の相関があることが明らかになった。このことは、日本の親の「見守る」しつけ方略は、4歳の時点では子どもの他者理解の発達を促進させていないことを示唆する。文化にあるしつけ方略は、子どもに十分理解されていない可能性があり、子どもにとっての意味を検討する必要性があることが示された。

第4章では、「見守る」しつけ方略、前章でのあいまいな養育態度が子どもにとってネガティブな意味をもつかどうかを、コルチゾール分泌量にみるストレス反応から検討した。子どものコルチゾール分泌量のサーカディアンリズムを調べたところ、健常なリズムを示した。このことから、分析対象となった子どもたちは、慢性的ストレス状態にはないことが確認された。次に、対人葛藤課題を実施した際のコルチゾール分泌量を採取し、課題のストレスに対する生理的反応を測定した。子どものコルチゾール分泌増加

量(AUCi10-50)を従属変数として階層的重回帰分析を行ったところ、子どもの他者感情理解と親の言わないで「見守る」方略の交互作用の効果がみいだされた。この結果から、他者感情理解が低い日本の子どもでは、親が「見守る」しつけ方略を多く用いる場合は子どもの生理的ストレス反応は高くなるが、親が「見守る」しつけ方略を少なく用いる場合は生理的ストレス反応が大きいことが明らかにされた。これは、子どもの他者感情理解が低い場合、子どもは親の意図を十分理解できず、親が子どもの様子を見守らないで、いろいろ言ったりしてみても、わからず、却ってストレスが高くなってしまうためと解釈することができる。一方、他者感情理解の高い子どもは、生理的ストレス反応が小さく、親の「見守る」しつけ方略の用い方が多いか少ないかによって、子どもの生理的ストレス反応の大きさに違いが見られなかったと考えられる。さらに、対人葛藤課題におけるコルチゾール分泌増加量の予測因には、文化差が示された。子どもの生理的ストレス反応について、日本では、子どもの他者感情理解能力が予測因となり、アメリカでは、子どもの気質の抑制的制御が予測因となることが明らかにされた。

最終章では、ここまでの研究成果を概観し、研究の限界と今後の課題が論じられた。3つの研究から、「見守る」しつけ方略は、現代の日本の母親に受け入れられ、子どもの自主的問題解決力の発達を意図した、親にとってはポジティブなしつけ方略であることが明らかになったが、子どもへのポジティブな影響はみられなかった。4歳の子どもの他者理解の発達を促進しないことから、「見守る」方略は子どもにとっては難しい方略であるといえる。しかしまた、生理的ストレス反応を示すコルチゾール分泌量との関連の分析から、子どもにとって必ずしもネガティブな影響をもつともいえなかった。ただし、子どもが親の意図を理解できる能力が低い場合は、親の「見守る」しつけ方略は困難な方略となることがわかった。本研究では、4歳児のみを対象としたこと、またしつけ方略をプライミングなどの実験的方法によって検証したのではないといった限界をもつ。そのことを踏まえたうえで、この結果は文化にある暗黙知となっているしつけ方略が、実際に、現在の子どもにとってどんな意味をもつのか、子どもの発達段階に応じて、再考する必要があることを明らかにした。

## ・ 審査の結果の要旨

### 1. 論文の構成

「見守る」しつけは、日本の子育てや教育の中でよく使われている方略であるが、他の文化からみると不思議な方略である。言語的にも行動的にも明示されない目標を達成

することを求めており、「いわれないのでわからない」ことは当然の帰結である。しかし、日本は「察し」の文化といわれるように、「いわないでわかる」ことが期待されており、また文化的目標としてそれを獲得してきている。「いわないでわかる」ようになるためのプロセスは、不明瞭であり、それが子どもにとってどのような意味をもつのかは疑問でもある。本論文は、「見守る」しつけ方略に着目し、子どもにとっての意味を検討したものである。大変ユニークな論文といえよう。

第1章において、従来の研究をレビューし、日本の子育てに広くみられる「見守る」方略が、他文化からみて、大変わかりにくい方略であると指摘したことは大変興味深い。これまでの子育ての文化比較研究では、日本における関係志向的子育ての肯定的要素を示してきたが、実際、その文化的子育てがどのように文化的学習プロセスとして成立するかどうかについて検討したものはほとんどない。「見守る」しつけ方略の問題点を指摘したことは評価されるが、子育ての生理的指標と行動指標に関しての先行研究についてのレビューは十分な展開がされていなかった。各章での言及に留まり、生理指標と行動指標を統合した研究の意義が述べられなかった点は残念でもある。

研究1において、「見守る」しつけ方略の親にとっての意味を明らかにしたことは評価される。これらの結果は、文化によるしつけ方略の違いを明らかにすると共に、しつけ方略という行動に、文化的意味が付与され、文化によって違った意味をもつ行動となることを明らかにしたものであり、文化比較研究の重要性と課題を示したものと見える。同時に、この結果は、日米比較によってみえてきた結果でもあり、日本で強い「気持ち主義」との関連についての丁寧な説明が必要であったと指摘された。

日本的な子育ての特徴である「見守る」養育態度の意味を、2つの実証研究によって再考するデータを提供したことは評価に値する。研究2では、関係志向性の中で重要とされる「他者理解」と、親の子育て方略との関連を見いだした。「見守る」子育ては、4歳児の他者理解を促進していないという結果は、文化にある当たり前の行動方略が単純な効果をおよぼしていないことを示し、その方略のもつあいまいさを明らかにしたものだとして評価する。日本にある子育てを再考したこの研究は、すでに発達心理学研究に掲載され、2014年度の優秀論文賞を受賞している。

これまでの比較研究では、親の養育態度と子どもの認知や行動との関連を検討したものが多く、生理的ストレス反応との関連を検討したものは少ない。本論文の研究3では、子どもの唾液を採取し、そのなかの cortisol 分泌量の分析は、その計算方法だけで

も多岐にわたり、多くのステップを必要とする。さまざまな分析を試み、興味深い結果を得たことは評価できる。データの処理、関連研究の検討について、大きな労力を捧げている論文である。さらに、コルチゾール分泌量の予測因に文化差がみられた点は大変興味深い。子育ての関連に着目した本研究の当初の仮説とは異なるため、十分に議論を展開することが難しかったが、むしろこのデータの分析を発展させることで、文化心理学の仮説を再考する可能性がある研究成果ともいえる。今後、欧米の雑誌論文として速やかに公刊することを期待するものである。

## 2．論文の特徴

本論文は、子育ての文化的特徴とその心理的意味について、有意義な研究知見を示すことに貢献し、今後の展望を示した。日米 160 組の親子に対し、実験、質問紙調査、コルチゾール分析を行った労作である。

子どもは親との相互作用を通して、経験や目標とするものを共有し、価値観や意味体系を親から受け取り学習していく。文化的学習も、親と情報を共有し、その文化にある価値観を学び、思考様式や行動様式を学習していくことになる。しかしまた、そのプロセスは必ずしも明確ではない。本研究で着目された、見守る方略は、「いわないでわかる子ども」という母親の発達期待を達成するために、母親が子どもの行動に介入しない方略をとることであり、文化の中で広く伝搬されてきたものであったが、それはまた子どもの学習を必ずしも簡単に促進させていないことが、明らかにされた。その点で、本研究は子育て方略の文化的意味の再考を迫ったものともいえよう。近年までの多くの比較文化研究では、日本における関係志向的しつけと子どもの発達について行動レベルで検討されてきたが、本論文では、子どもの行動指標と生理指標を統合した点から検討しており、このことは、本論文の特長でもある。

## 3．論文の評価

さらに洗練すべき部分は少なくないが、日本における子育ての特徴をとらえ、今後の子育て方略に示唆を与えるものであり、今回得られたデータがさらに発展する可能性があるものと評価された。文化比較研究のなかでも重要な視点を提供するものである。結論として本論文は課程博士の学位認定に十分適切なものであると考える。

#### 4 . 最終試験の概要

( 外国語試験 ( 英語 ) の結果も含む )

7 月 10 日午後 4 時から 5 時半、公開形式で最終試験が実施された。申請者が 45 分間、論文の概要について、発表し、その後審査委員からの質疑応答が行われた。主な内容は以下の通りである。

「見守る」養育態度の概念について

インタビュー調査の手続きについて

統計的分析について

研究 3 における交互作用の結果の解釈について

申請者は適切な回答をしていたと評価された。

外国語試験については、口頭で行われた。この研究の意義および日本的な子育てがなかった場合に日本的心性が変化するか否かといった質問が英語でなされ、それに対して、適切な回答がなされた。また試験とは別に、これまでの海外での学会発表および雑誌投稿があることは、外国語能力について肯定的な評価となった。